
【BLEACH】 復活、悪夢の十刃達。

神零月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【BLEACH】 復活、悪夢の十刃達。

【Nコード】

N2063Q

【作者名】

神零月

【あらすじ】

日雛寄りになりますが、悪しからず。

空座町で、十刃達と藍染との死闘を繰り広げ、一護は死神の力と引き換えに、藍染を中央四十六室に閉じ込めておくことができた。それから数日が経ち、空座町、尸魂界は平和な日々を送っていた。…筈だったが、死んだはずの十刃達が、尸魂界に姿を現した！ 中には、中央四十六室に閉じ込められていた藍染の姿も！ 更なる力を手に入れた十刃達は、死神たちに、復讐の十の刃を向け

て…！？

48巻後…破面篇終了後の話です。

± 第一話 ± 平和の訪れ（前書き）

日離出ますので、苦手な方はまわれ右
↑

† 第一話 † 平和の訪れ

ここは………尸魂界。

藍染と十刃との死闘から、数日が過ぎた……

何気に、雲一つない蒼い空が……懐かしい思いにさせる。

でも、そんな平和も、長くは続かなかった。

—— 第一章 —— 【平和な日々】

「松本のヤロー……仕事ほったらかしにして何処行っただ……」

毎度毎度のことに頭を悩ませている、銀髪碧眼の少年、日番谷冬獅郎。

自分の副官、松本乱菊を探しているのだが……やはり、見つからず、途方に暮れているところである。

仕事をしていたら、いつの間にか忽然と姿を消していたので、探している途中だった。

時刻は…午後の2時過ぎ。

長い廊下を歩いていたので、かなりの時間がかかってしまった様だ。

—— 今日中に仕事終わらせるか……

乱菊が帰ってこないのは目に見えている。

何処に行ったのかまでは知らないし、探してもきつと戻ってこないだろう。

なんなら、ちゃっちゃと終わらせて、自分がしたいことに専念すればいい。

夜までに終わるんであれば……そう、昼寝とか。

もう昼寝という単語しか出てこない。

それほど…睡眠を今までとってきてないのだ。

やる気の出ない思考を、何とか、やる気を出す様に促す……しかし、簡単に出るもんじゃない。

あと何百枚との書類たちが隊舎室の執務室にいるのだ。

……やる気の出る話じゃない。

日番谷は深いため息を零して、この場を去ろうとする。

「あつ、日番谷君……！」

それを引きとめたのは、久しぶりに聞く、幼馴染の雛森桃の声。

背後からかかった、その声に振り向く。

雛森は、数量の書類の束を抱えていた。 きっと、他の隊舎に配るものなのだろう。

「雛森……？」

廊下の奥の方にいた雛森は、日番谷の元へ、駆け足で寄ってくる。

「どうしたの、こんなところに一人で？」

「ああ…実はな……」

説明しようとしたが、ある疑問が、日番谷の頭の中をよぎった。

「………… お前、入院してたんじゃないか…………」

そう…藍染との死闘を繰り広げている最中に、一度はとどめを刺したと思われた。

しかし…刺したのは、藍染じゃなく、雛森——

いくら鏡花水月の能力があったとはいえ、守るべき人を、己の手で刺してしまい、拳句の果てに、かなりの危険な状況にまで追いやってしまった。

日番谷はそれを思い出し、フツと廊下に視線を落とす。

何を考えてるか察知できた雛森は、日番谷に優しい視線を向ける。

「それなら大丈夫だよ！ ちょっとしたりハビリ中なんだあ！ そ

れに、日番谷君のせいじゃないよ!」

そう明るく言ってくる雛森に、日番谷は少しでも心救われた気持ちになることができる。

彼女は、決して人を責めない。

自分が、どんなに苦しい思いをしても、絶対に……

「そっか……」

日番谷は、ふと、考え付いた。

「お前、今から暇か?」

「? どうして?」

「いいから、どうなんだよ?」

雛森は、日番谷がこう聞いてくる理由が分からなかった。

とりあえず、用事はないので、「大丈夫だけど……どうしたの?」
と聞く。

すると、日番谷は顔には出さないが、嬉しそうな声で、

「んじゃあ、ちょっと来い!!」

「ふわあっ!!」

無意識に雛森の手を離さない様に、握って走り出す。

そう…離さない様に……

二度と、傷つけないために。

「？」

「あれは……」

廊下を駆け足で走っていた日番谷と雛森の目に、廊下の先で団子を片手に、ある金髪の女性が映った。

‡ 第一話 ‡ 平和の訪れ（後書き）

初めまして、日雛大好き神凪月です。

初なんですが…下手ですね、やっぱり！（・ω・、・）

…あれ？ しかもなんか無理やりまとめたしまった…↑オイ

ま…まあ気にせず気にせず！！（殴

次も頑張りますよ！！（立ち直りが早い

……… ああッ！！ 宿題をやらなければ！！！！！！

± 第二話 ± いつも通りの… (前書き)

キャラ崩壊は……多分しません……↑

応援お願いします!!

‡ 第二話 ‡ いつも通りの…

「あつ、たいちよー！　こんな所でなにしてるんですか？？」

廊下の先に、金髪でナイスバディを持つ、書類のサボリの達人…

…何故か、手には団子を持っている。

松本乱菊。　それでも、十番隊副隊長を務める実力者だ。

「松本…お前…どこに行つ「隊長」たら、私がないからって、仕事サボっちゃだめですよ？」

それとも…と乱菊が繋いだ言葉が、

「雛森連れて、幼馴染デートですかあ？　だったら、早く言って下さいよー！」

…当たり前のように、日番谷の眉間の皺が刻まれ…
ちよつとした寒気が、乱菊を包む。

団子なんて…少し、棒が凍ってるぐらいだ。

「日番谷君…あんまり、怒らない方が…」

その様子を見て、雛森は、苦笑いをし、その言葉を零す。

乱菊はというと、言い過ぎたか…と心の中で呟いて、対処法を考えていた。

「……………アハハ…冗談ですよお……………でわッ！」

対処法は……………冷や汗を流しながら、とりあえず、一歩一歩後ずさり……………

……………丁寧に瞬歩を使ってその場から逃げた。

「……………松本おーッ！……！」

「ごめんなさい……っ！……！」

そう残して、消えた乱菊。

取り残された日番谷はというと……

やり場のない怒りに、肩を震わせていた。

‡第二話‡ いつも通りの…（後書き）

さっそく下手をやらかした……ド下手作品ですね！
↑
短いし……

……お許しw（ry

‡ 第三話 ‡ 足りない…？（前書き）

少々のネタバレを含みます。

後半は一護出ます。

何だが…切ない感じになってしまっていると思いますが…
それでも良い方、どうぞ。

‡ 第三話 ‡ 足りない…？

「……… ったく……… 松本の奴、覚えてやがれ……」

ため息をつき、その場に頂垂れる日番谷と、逃走した乱菊の一部始終を見ていた雛森。

(… 大変そうだなあ…)

なんてことを思いながら、日番谷が落ち着いて喋るのを待った。

* * * * *

場所は変わって——… 現世。

前まで、戦闘の舞台になっていた、空座町。

この町は救われた。

護延十三隊と、仮面の軍勢と、ある人間たちによって。

【空座一高前】

色んな声が、聞こえてくる。

「じゃーねー」

やら、

「また明日〜！」

やら……

ため息をつく。

けれど、清々しい気分だ。

守れたんだ。

この世界を。

この——空座町を。

ある夕暮。

「……………やってらんねえ……………」

薄橙色の景色を後ろに、オレンジ色の髪の毛、高校生がアルバイトから家に向かって歩いていった。

プロフィールは。

名前、黒崎一護。

瞳の色、ブラウン。髪の色、オレンジ。

一般的な(?)高校生。

アルバイトは、うなぎ屋。通称、なんでも屋。

幽霊は、見えない。

職業——

‘元’死神代行。

一護も、空座町を守った、人間である。

あの戦闘以来、一護は死神としての力を全て失い、幽霊の気配さえ感じなくなった。

でも、これが一護にとって望んでいた世界。

幽霊が見えない世界。

一般の人が感じている、世界。

…しかし、何か、寂しいものが…無意識にこみ上がってくる。

何かは…分からない。

「あーあ……帰んのも遅くなっちまったし、どんな反応喰らうかな……」

こんなことを考えられるのも、普通の平和な日常に戻ったから。

普段は、仲間のこと、戦いのこと……色んな事が頭にあった。

——今は、アルバイト、家のことや、そういった、‘普通’のこと。

一護はフツと、地面に目を伏せる。

この世界を守ることができて、嬉しい筈なのに。
憧れていた筈なのに。

でもこれは…自分にとって、本当の憧れた世界になったのか……

空を見上げる。

薄橙色の空が眩しい。

昔は、色んなものを、守りたかった。

『勝たなきゃいけねえから、戦うんだっ！！！』

過去。 全てが。

できれば…戻りたい。

皆と、また…背中合わせで戦いたい。

まだ…守りたい。 未だに守りきれてない、全てを。

ぽっかりと、心に穴があいたような……そんな感覚が、今にも落ちそ
うな夕日が、一護を包みこんでいた。

‡第三話‡ 足りない…？（後書き）

……………何なんでしょうね、これ。（焦

シリアス…？ 的な感じになっちゃいました。
後半は一護のことですね。↑

結構書いていて長く感じた…！ 間違え等があつたら、教えてくだ
さい！

‡ 第四話 ‡ 一人、想ふ（前書き）

織姫中心となっております。

石田とチャドは…多分出ません↑

戦闘になら出るかも！ ってところです。（ハッキリしろや

‡ 第四話 ‡ 一人、想ふ

また、あるアパート。

夕日の光が、窓から差し込み、部屋は橙色で満ちている。

一人の飴色の長髪の少女が、遺影の前で正座し、手を合わせている。

その遺影は、優しい顔をしている。

この手を合わせている少女の名は、井上織姫。

「今日も元気に過ごしたよ、また明日も頑張ります。」

そう言い残し、さてとっ！ と元氣よく立ちあがる。

織姫は、能力者でもあり、死神という存在を知っている数少ない人間でもある。

一人暮らしをしていて、一護と同じ高校を通っている。

「えっと、今日は昨日の残りもので…にんじんもあるし…生クリームもあるし…何作ろうかな〜！」

なんてはしゃぐ織姫は、本当に普通の高校生。

…作るものは、アートの近いものになるが。

こんな温厚で、心優しい彼女も、戦闘に参加したことがある。

虚圏側に埒されていた経験も。

『勝たなくていい……頑張らなくていいから……』

『これ以上…怪我…しないで…！』

一護に言った言葉。

『怖くないよ。』

ウルキオラに言った、最期の言葉。

自分の言葉を思い出す。

ただ、必死だった。

敵味方関係なく、分かり合える日が来ると信じていた。

しかし、願いは届かなかった。

残酷な運命だった。

あの壮絶な戦い以来……虚の数も減ってきている。

かなりの数いたのに……不思議な気分だ。

でも、完全にいなくなったわけではない。

今の時点では、一護は死神の力が無いので、石田雨竜と言う滅却師が虚の討伐を行っている。

死神の姿も……もう見なくなつた。

「皆……本当にどうしてるんだろ……」

ルキア、恋次、乱菊、日番谷……さまざまな人が頭の中によみがえる。

今日何度目か分からない、ため息をつく。

「皆に、会いたいなあ……」

そう呟く織姫を、悲しげな夕日の光が、包み込みんでいき、最後。

今日一度だけの夕日が沈んだ。

‡ 第四話 ‡ 一人、想ふ（後書き）

……… またシリア s (r y

…さあて、話のオチ（？）も見えなくなってきたし、まともにも無
くなってきたし…

明るくいこうか！！（理由になってない

おかしい部分があつたら、どうぞ教えてください。

‡ 第五話 ‡ 簡単なことが、難しい。(前書き)

いやー…きっと駄目文になるだろうなあ……↑殴

BLEACH好きの皆様、どうぞお許しを(r y
日雛フィルターかかります。

⌘ 第五話 ⌘ 簡単なことが、難しい。

・ 十番隊舎 執務室

「ねえ… 日番谷君。」

「……………何だ。」

「… 何でもないや。」

「……………そっか。」

さっきから、この会話の繰り返し。

日番谷はデスクワークをこなしながらも、雛森の呼びかけには答えている。

でも、雛森の言いたいことが日番谷は良く分かってない。

繰り返しと言っても、日番谷は苛々しているわけじゃない。

ただ、分からない。

だから、書類をして、ごまかしている。

日番谷は、少し雛森の方に目を向ける。

彼女はソファに座って、机に目を伏せているばかり。

ちょうど顔が見えない位置で、どんな表情をしているかはイマイチ分からない。

もう、分からないものだらけだ。

日番谷は、軽いため息をついて、筆から手を離す。

「なあ……雛森。どうしたんだよ？」

答えない。

「何か、今日あったのか？ 言いたいことがあるなら言ってくれよ。」

幼馴染といえど、相手の思っていることが全て読み取れるわけじゃない。

答えは――ない。

「……おい、雛森！ 人の話を――」

流石に何も答えないには力チンと来たのか、日番谷が少しキツめに文句を言おうとした。

しかし、その言葉を失くしてしまうぐらいのことが、彼の瞳には映った。

雛森の肩が、震えている。

何事か、と椅子から立ち上がった。

ただただ呆然と、突っ立っていた。

「……ひっく……うう……ひっ……」

彼女の瞳からは、とめどなく涙が零れおちていた。

その瞬間、日番谷はすぐさま彼女のもとに駆け寄り、落ち着いた様子で、隣に座る。

「——…どうしたんだ、雛森。」

そう、震える背中をさすりながら、優しく問いかけた。

「日番谷君はっ……いなく……ならないよね……?」

どういつことが、分からなかった。

「どういことだ？」

「日番谷君は…私の目の前から…いなくなるじゃないよね…？」

ある記憶が、日番谷の頭の中をかすめた。

出てきた単語は一つ。

藍染 惣右介。

「私の目の前から……いなくなってくの……夢でもそう……消えていくの……！」

毎夜、彼女は一人で、泣いていたのだろうか。

一人で。

日番谷は、唇をかみしめた。

隣で泣いている大切な人の、本音しか聞くことができない。

慰めの、言葉が。

何を言っているのか、分からない。

ただ、背中をさすって、安心させることしか出来ない。

———
守りたい。

どれだけ、力が欲しいと願っただろう。

どれだけ、彼女を守りたいと、願っただろう。

どれだけ、努力をしてきただろう。

簡単じゃない。

簡単そうで、難しい。

どれだけ、その現実叩きのめされてきたか。

己が、一番良く知っているではないか。

日番谷は、そつと、雛森の肩に手を添え、自分の方に引き寄せた。

こつやって、自分の存在を確かめさせてやることしか出来ない。

悔しくて、悔しくて仕方がなかった。

橙色の光が、窓から差し込んでいる。

その中でそつと、目を閉じてみる。

橙色の世界が、目の裏にまでしみ込んでくる。

真つ暗な世界は、訪れない。

「俺は——…ずっと、此处にいる。心配すんな…」

雛森は、弱々しくだがうなずいた。

頼りにされている。それは嬉しい。

なのに自分には、まだそのような、力がない。

(どれだけでも……強くなってやる……)

そう決意した彼の碧翠の瞳は、揺るぎない、瞳に変わっていた。

‡ 第五話 ‡ 簡単なことが、難しい。（後書き）

学年末テスト期間に入ってるのに、悠長に（久しぶりに）小説書いてる自分ってどうなんだろう…

最近、小説書いてなかったから、このサイト開けても、何かにビビって指を動かせなかったんだぜよ。orz

…とんだチキンでスイマセン…あつ、ローストだけはしないでください…↑

あと、まとまってない&意味不明で暗いものでごめんなさい

‡第六話‡ 狂う世界。(前書き)

うーん……大分の放置のせいで、わけ分からん↑

初、ルキア登場ですw

†第六話† 狂う世界。

冷たい夜風が、頬を撫でる。

漆黒の闇に、黒髪の少女が尸魂界の夜道を歩いていた。

「――…まだ、冷えるものだな。」

この古風な口調の少女の名は、朽木ルキア。

十三番隊隊士だ。

あれから数日、何事もない平和な日々が続いていた。

もちろん、空座町にも異変は無いだろう。…おそらくの話だが。

虚の数も何故か一気に減り、仕事が減ったため、楽を出来るようになった。

……あ奴とは、もう会えないだろう――

はあ…とため息をつく。

今では完全に、そのことは忘れ去られたかのよう。

ふと、空を見上げる。

——雲行きが怪しいな……

折角の夜空が台無しだ…そう思っぐらいの厚い黒い雲。

嫌な感じだ。

心なしか、そんなことを思っていると、ふわり…と、何処から来たのか、一羽の地獄蝶がルキアの横に降り立つ。

「何故、地獄蝶が――」

「朽木ルキア様、今すぐに隊舎室へお戻りください。――緊
急です。」

嫌な予感は的中した。

理由を聞いた後、背筋に冷たいものが這い上がって来たような感
覚に落とされた。

そして、気がついたら無我夢中に走っていた。

ありえない――

平和だ、そう思っていたものが、一気に崩れ去った。

±第六話± 狂う世界。（後書き）

案の定、話がまとまん……

†第七話† 出動！ 護廷十三隊！（前書き）

うーん…上手くできるといいなあ（笑）

†第七話† 出動！ 護廷十三隊！

「諸君、全員揃ったかね？」

ここでは、隊首会が急遽行われた。

それは何故か。

消えることのない姿が、忽然と姿を消したからだ。

その姿はだれか？

姿を消した人物は――

「総隊長、藍染惣右介が“地下監獄最下層第八監獄”無間”から抜け出したなんて…本当に事実なのでしょうか？」

質問をしたのは、四番隊隊長・卯花烈。

「無論じゃ。中央四十六室から緊急で此方に情報が回ってきた。それを聞き逃す訳が無かるう」

「…ですが、その情報が偽りであつたら…」

「儂が直々にその場所へ行つて確かめてきた。…それは事実じゃ」

辺りが、静寂に包まれる。

「それでおぬし達を集めたのじゃ。悪く思ふな」

「まあいいじゃない。とりあえずどうするか…話を進めようよ」

口を挟んだのは、八番隊隊長・京楽春水。

そう、抜け出したのは、藍染惣右介なのだ。

中央四十六室から、いきなり姿を消したという。

しかも、複数の霊圧を残して。

「多数の霊圧の痕跡は、同じところで途中で切れておる。……現世、あるいは虚圏に姿を隠したとは思えん。」

「……それで、隊長格数名を現世・虚圏に送るということが……」

淡々と言い放ったのは、六番隊隊長・朽木白哉。

「その通りじゃ。敵は何人いるか分かんぬ。……よって、虚圏に十一番隊隊長・更木剣八。十二番隊隊長・涅マユリ。及び、六番隊隊長朽木白哉。……六番隊以外は副隊長を各時連れて行くように。」

「ハッ！ 何で俺がこんな奴と行かなきゃならねえんだ。俺一人で十分なんだがな」

そう言い捨てるように言ったのは、更木。

「此方こそ願ひ下げだネ。　こんな野蛮人と一緒にいるのはごめんだヨ」

言い返したのは、渥。

「私は一人で行く。　…兄らは邪魔をするな。」

そして、最後に白哉。

「ほお…言うじゃないかネ？　実験材料になってくれるのは構わないが、ピーピー言わないで欲しいだヨ」

「うるさいぞ、何様のつもりかは知らぬが、それ以上喋るな。　…行く前に兄らを斬ることになる」

「面白えじゃねーか、なんなら相手してやるぜ？　俺の足手まといにならねえか、判断してやるよ！」

だんだん霊圧も上がって行き、更木が刀を抜こうとする。

そこで、ダンッ！！！！　と杖が床に当たる大きい音がした。

「黙らッしゃい、小童共がッ……！」

そして、ようやくまた静寂につつまれる。

「……総隊長、現世には誰が……」

そこで口を開いたのは、十番隊隊長・日番谷冬獅郎。

「現世には、十番隊隊長・日番谷冬獅郎。五番隊副隊長・雛森桃。

六番隊副隊長・阿散井恋次。

……ここでは日番谷隊長が指揮を取るように。以上じゃ。準備出来た者から目的地へ急げ。」

そして、隊首会は終了。

ここからが、幕開けだった――

†第七話† 出動！ 護廷十三隊！（後書き）

誤字等の間違いがあれば、こっそりと教えてください（汗

もっと喧嘩を派手に書きたかったかなあ
↑

‡第八話‡ 各、目的場所へ。（前書き）

最近サボってすいません；

とりあえず、最後まで頑張って書き上げます！

久しぶりに書くので、文才無いくせに更に無くなっていると思いますが…；

‡ 第八話 ‡ 各、目的場所へ。

穿界門前――

十番隊隊長、日番谷冬獅郎は後ろを振り向き、二人の副官を交互に見る。

「準備は、いいんだな」

そう、二人に問いかける。

「俺は大丈夫ですよ」

「私も…大丈夫です」

六番隊副隊長、阿散井恋次と五番隊副隊長、雛森桃は簡潔にそう答えた。

「そうか…それじゃ、行くぜ」

日番谷は確認した後、穿界門に向き直り、入って行く。
残りの二人も、それに続いて入って行った。

* * *

その後、別の二人が穿界門前に到着した。

「ほオ…どうやら一番らしいネ」

「はい、マユリ様」

十二番隊隊長、涅マユリと十二番隊副隊長涅ネムだ。

「さて…残りの者を待っていても仕方ない。放っておいて、さっさと浦原喜助の元へ行くヨ」

「はい、マユリ様」

そうマユリは心底嫌そうに言って、さっさと穿界門の中へ入って行ってしまった。

更にその後。

「オイ！ 涅マユリはまだなのかよ」

十一番隊隊長、更木剣八は吐き捨てるようにそう言った。

「うーん、まだ来てないのかなあ」

その肩からひよっこりと顔を出して、周りをきよろきよろ見だしたのは、十一番隊副隊長の草鹿やちる。

「どうやら先に行ったようだ。我々もさっさと向かうぞ」

六番隊隊長、朽木白哉が淡々とそう言った。

そして、さっさと中に入ってしまった。

更木は、面倒臭そうに頭を掻いた後に、チツと舌打ちをして白哉の後に続いた。

各時、それぞれの目的地に向かって――

‡第八話‡ 各、目的場所へ。(後書き)

文才大分落ちてますね、思ってた通りですが^^;
ちよっと、キャラ違いかもしれませんがお許しを…orz

脱字、誤字等があればこっそり教えてください。

…ふー…頑張ったなあ…↑

‡第九話‡ 動き出す闇（前書き）

…頑張つて更新します！（それだけか

† 第九話 † 動き出す闇

暗い、暗い、静寂に包まれた森。 周りは大虚の声とは言えないような、音が耳をこだます。

その森の中颯爽と、黒いマントに身を包み、表情一つ変えずに向かう人物が一人。

「——このへんかな」

ポツリ、そう呟いて目の前にある大きな洞窟のようなものを見る。先は暗くてよく見えないが、急に生温かい風が頬をスウ…と撫でた。それに、目を細める。

「さて、準備に取りかからなければな」

フードを取り、洞窟を見据える。そして引き込まれるかのように、藍染惣右介はそのまま闇へ消えていった。

* * *

砂が風で宙を舞っている。その砂埃を鬱陶しくも思いながら、ある場所へ向かってひたすら歩いていた。

「チツ…まだなのかよ」

吐き捨てるかのように、呟く。しかし、誰もいない。自分はただ、「此処へ向かえ」と言われたただだ。誰に？ あいつに、だ。

普通だったら逆らう。しかし、命を救われた、となれば嫌でも少しの恩くらい返さなければいけない。そう思うのだ本能が。けれど、最後まで従うつもりはない。

第6十刃のグリムジョーは、まだ見えぬ、己の前の居場所…虚夜宮を目指す。

±第九話± 動き出す闇（後書き）

短いですが、お許しを…（汗

ようやく破面登場です！↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2063q/>

【BLEACH】 復活、悪夢の十刃達。

2011年11月16日11時50分発行